進路ジャーナル

第 105 号

平成29年７月13日

編集発行

磐城桜が丘高等学校

進路指導部

印刷 ㈱ネクスト情報はましん

焦らず弛まずコツコツと

進路指導主事　豊田　浩美

昨年の進路ジャーナル夏号は、「ウサギとカメ」についての話でした。今年はみなさんもご存知であろう「アリとキリギリス」。この話は、もともとは「アリとセミ」でしたが、イギリスには蝉がいないのでキリギリスに置き換えられたようです。けれどもとが「セミ」だというのは納得です。なぜなら「夏の間歌ってばかりいる」と言えば、日本でもやはりセミですから…。この話の前半部分はみんな共通だと思います。セミは夏の間歌って遊んでいる。一方のアリはせっせと働いている。冬になり、セミは食料がなくなる。セミはアリに「食べるものをください」と言いに行く。ここまでのストーリーはこれで異論はないはずです。しかし結末はいろいろあるようです。「冬になって、穀物が雨に濡れたのでアリが乾かしていますと、おなかをすかせたセミが来て、食べ物をもらいたいと言いました。『あなたは、なぜ夏の間食べ物を集めておかなかったんです?』『暇がなかったんです。歌ばかり歌っていましたから』と、セミは言いました。すると、アリは笑って言いました。『夏の間歌ったなら、冬の間踊りなさい』アリもずいぶんとカッコいい台詞をはきます。」教訓を求めるとしたら「みんな、怠けてないできちんと働こう」というところでしょうか。しかし、日本に普及している多くの物語は、これとは違う結末が待っています。「さあ、遠慮なく食べてください。元気になって、ことしの夏も楽しい歌を聞かせてね…キリギリスは、うれし涙をポロポロこぼしました。」教訓は「困ってる人を助けてあげる優しい人になりましょう」でしょうか。さらに、もう一つの結末は、また別のところにあります。アリに断られ、セミは餓死するわけですが、実は、最後にもう一文だけ台詞がつくというものです。「すると、アリは笑って言いました。『夏の間歌ったなら、冬の間踊りなさい』すると、セミはこう答えました。『歌うべき歌は、歌いつくした。私の亡骸を食べて、生きのびればいい。』この台詞が物語を転換させます。」アリは「ただ生きるために働きつづける」アリとなり、セミは「自分のやりたいことをやりつくしたのだから悔いもなくかっこよく生きた」セミになる。最後に意地をはっただけかもしれないし、ただの負け惜しみともとれる。みなさんは、どの結末が好きですか?

「夏の間歌ってばかりいた（つまり遊んでばかりいた）ら、当然今まで貯蓄してきた食料（学力）は底をついてしまいます。家庭学習時間の調査結果を見ても、残念ながらすでにセミ予備軍の人が沢山いると想像できます。この夏を如何に過ごすかで、セミにもアリにも成り得るのです。この寓話の結末が三パターンあるように、「生き方に正解がある」と断言できるわけではありません。Aという生き方もある。Bという生き方もある。Cという生き方もある。できるだけ多くの生き方や考え方を知った上で、「AもBも解るけど、私はCの生き方をしたい」と自分自身で決めるべきなのです。誰のためでもない。自分の人生なのですから…。「いろんな考え方を想像して自分の考えを決める」ということを実践するのはとても難しいし、理解することも難しいと思います。だから、今自分ができることを精一杯やるべきなのです。

「夏を制するものは受験を制す」という言葉があります。この言葉を聞いて、「よし、夏休みは勉強しよう!」と意気込んで、たった一ヶ月しかない休みに無謀とも思える勉強スケジュールを組み込む人もいます。しかし、この言葉の意味は夏休みに沢山勉強するという意味ではありません。考えてもみてください。夏休みといえば夏です。暑いです。だらだらします。遊びも誘惑もいっぱいです。そんな中、果たして勉強ばかりできるでしょうか。結論としては、「こんな最も勉強しにくい夏に勉強できるなら、他の季節にだって勉強できる。すなわち、夏に勉強できる者は、年間を通して勉強できるので、受験に打ち勝つことができる」ということなのです。それが「夏を制するものは受験を制す」の本来的な意味です。ここまでコツコツ勉強してきた人もそうでない人も夏休みと言って気張らずに、コツコツやりましょう。

この夏は、常に体調管理に気を配り規則正しい生活をおくること。そして自分に合った無理のない勉強を毎日続けることが必須です。つまり、日々単調な時間を、臆せず、くじけず、自分なりの勉強を丁寧に粘り強く継続できるか、そして最後まで諦めない強い意志を持ち続けられるか否かが、「自分の希望進路実現」の大きな決め手となるのです。将来を見据えて勤勉な毎日を過ごすアリになるか、はたまた自由を求めてその日暮らしで刹那的な生き方をするセミになるのか、それは貴方がた一人ひとりが「自己責任」のもとに選択できるのですよ。

「念願は人格を決定す　継続は力なり」
～学びへの意思を強くし実践力を高めよ～

校長　根本　良政

幼稚園、小学校、中学校の学習指導要領が平成二十九年三月三十一日に改訂され、今年度周知徹底を図り、幼稚園では平成三十年度～全面実施、小学校では二年間の移行期間を経て平成三十二年度（二〇二〇年）～全面実施、中学校では三年間の移行期間を経て、平成三十三年度（二〇二一年）～全面実施される。高等学校はというと、今年度末に学習指導要領が改訂され、一年間の周知徹底を図り、平成三十一年度～三年間の移行期間を経て、平成三十四年度（二〇二二年）から年次進行で実施される。

この改訂の背景には、人間の話しことばを解析して認識し、インターネット環境でサービスを提供するSiri（シリ）をはじめとする人工知能（AI）の進化や、東日本大震災等の災害、地球環境の変化、さらには、社会のグローバル化による人々の生活習慣・思考パターンの多様化と複雑性及び自国住民によるテロ行為（homegrown terrorism）など予測困難な課題や状況を解決して生き抜き、未来の社会を創造する世代にふさわしい資質と能力を確実に身に付けさせる学校教育の必要性がある。

特に、コンピュータ技術や生命科学などの研究が飛躍的に進み、人間の脳と同じように一四〇億個の神経細胞（ニューロン）と神経細胞間の結合（シナプス）を模倣したニューロコンピュータが開発されるのも時間の問題であり、二〇三〇年代には、人間の脳の神経細胞のネットワークをそのままニューロコンピュータにコピーすることが可能になるとまで言われている。これに伴い、二〇四五年頃に、人間と人工知能とが融合し人類の進化速度が無限大となるような技術的な特異点（Technological Singularity）が起こり、これまでの人類の進化の過程や文明の発達とは連続性のない、全く異なる進化の時代がやってくると予測されている。

これまでの二十世紀型の知識の暗記力や暗記した知識を元の事象に一対一で対応させるような能力はAIの検索機能で代替えできる。事務処理をはじめとして、様々なこの種の能力が求められる職業・職種はAIが担うことになろう。人間は、むしろ、自らの判断でAIを管理監督し、有効活用できるようになる必要がある。そうでなければ、人工知能を凌げず、機械の単なる操縦者あるいは機械に管理される労働者になるか、大量の失業者の仲間入りをしてしまうことになる。これからの時代を生き抜き、二十二世紀の土台を創る人間に求められるのは、予測できない変化に受け身ではなく、主体的に向き合って対処でき、社会の中での自分の立ち位置と役割を定め、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、社会のあるべき姿を描いて、他者と協働し課題を解決していく力である。

そこで、これらの力を備えるための学びが求められることになる。具体的には、高等学校教育改革と高大接続改革である。高等学校教育改革については、先に述べた学習指導要領の改訂と一体となった学びの改善であり、暗記型・知識吸収型から「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニングの視点での学び）への改善での生徒の資質・能力の育成である。そして、この定着度を図るのが、平成三十一年度から試行実施予定の二高校生のための学びの基礎診断（仮称：以前の高等学校基礎学力テスト）である。高大接続改革の一つは、大学入学者選抜の改善であり、センター試験に代わる平成三十二年度実施予定の「大学入学共通テスト（仮称：以前の大学入学希望者学力評価テスト）」の導入、個別大学の入学者選抜の改革である。これらの改革は、実際には、実施予定年度から始まるのではなく、既に平成二十八年度から試行調査やプレテストが実施されており、平成二十九年度センター試験の問題でも知識の一対一の対応を求める問題から論理的な思考力、判断力を測定する問題が出題されている。本校でも、十一月中旬に三年生一八八名が「大学入学共通テスト」のプレテスト（数学Ⅰ・数学A、地理B）を受験する。

本校は、平成二十八年度からシラバス・学習指導計画の見直し、授業展開も講義形式からICT機器を活用しての対話形式へと転換し、生徒の思考力と主体的な学びを育んでいる。

生徒諸君が、現在の、そして、これからも起こり得る予測困難な状況を解決して生き抜き、未来の社会を創造する世代にふさわしい資質と能力を確実に身に付けるようにしてもらいたいからである。

生徒諸君の学びへの意思の強さと実践の度合いを調べてみたが、要求していることに応えられていないのは大変残念である。平日の学習時間の平均は、一年生が一・九時間、二年生が一・五時間、三年生が二・一時間であり、全校生の平均学習時間は一・八時間である。また、学びへの意思の強さと言える、学年十二時間を実行している生徒は、八二四名の回答中三十七名四・七%と極めて少ない。全国の進学校の生徒の平均学習時間（二〇一五年三月高校三年生調査）は、学校の宿題一時間四分十宿題以外二時間三十二分の計三時間三十六分、三時間以上の学習者の割合は五二・四%（本校生一三・八%）であることからして、実践の度合いも極めて不十分である。先に述べたように、二十世紀型の知識の暗記力や暗記した知識を元の事象に一対一で対応させるような能力はAIの検索機能で代替えできる。そのような知識や情報はグーグルの検索やSiriで瞬時に取得できる。生徒諸君には、人工知能に身を委ねるのではなく、一日三時間～五時間の学習時間を確保して、学びへの意思の強さと実践の度合いを是非高めてほしい。家庭学習時間は自分と対話する貴重な時間である。これなくしては、人としての生き方や人格は定まらない。生徒諸君が自律した学習者となり、地域や日本を支えるリーダーとしての自分の立ち位置と役割を定め、主体的に考え判断して、困難な状況を打開し、二十二世紀の土台の創り手となることを切望する。

筑波大学訪問

二学年主任　小沼　仁一

五月二十三日（火）、大学の雰囲気を早期に体験し、今後の学習に対する意欲の向上を図る目的で、難関国立大学で研究施設の充実した総合大学である筑波大学を二年生全員で訪問した。例年と同様に模擬授業、施設見学、全体会（講義）の日程で、生徒達は様々な経験をし自己の進路について考えを深めることができたようである。

当日のつくば市は正午過ぎに二十七・七度の気温を記録し、教室内の気温は三十度を超えると思われる程の暑さであった。しかし、そんな中でも筑波大学生は講義中心の授業にもエアコン無しで集中して取り組んでおり、〝流石だなあ！〟とその姿勢と意欲に感嘆させられた。また、キャンパスが広大であることによるものと思われるが、敷地内をかなり多くの自転車が往来していることに驚いてしまった。結構なスピードで走っており、自転車も歩行者もお互いに油断できない感じだった。

ほとんどの生徒にとって、いわき明星大学以外で初めての本格的な大学見学であり、大学の雰囲気や大学生活をより強く意識できたようである。また、今回の経験を基に、今後の各大学等でのオープンキャンパスにも積極的に参加し、より自分に合った進路の実現に向けて真剣に努力を続けて欲しいと願っている。

模擬講義題・講師一覧

1	「日本語を生かした楽しい英語 ―私の過去・現在・未来から」 島岡　丘　先生
2	「プログラミングの考え方」 宇都宮　公訓　先生
3	「日本語の美しさ」 湯澤　質幸　先生
4	「外国語学習（英語）と言語の面白さ」 草薙　裕　先生
5	「個性尊重のフレックス総合評価」 橋本　昭洋　先生
6	「都市空間とは何か」 腰塚　武志　先生
7	「ニホニウムを含む元素のお話」 大嶋　建一　先生

見学施設一覧

1	中央図書館
2	プラズマ研究センター
3	計算科学研究センター（COMA）
4	研究基礎総合センター（応用加速器部門、分析部門、工作部門）
5	アイソトープ環境動態研究センター 放射線研究部門
6	先輩との懇談

全体会講義

1	「放射線の基礎と健康影響」 松本　宏　先生

生徒感想文

二年四組　鈴木　ひとみ

第一志望の大学へ行けたことは、貴重な経験になりました。「日本語を生かした楽しい英語」という講義では、英語の発音の中には日本語と似た音がたくさんあることや自分なりの言いやすい発音の仕方など、楽しく英語を学んでいくコツを教えていただきました。

施設見学では、桜が丘出身の二人の先輩たちの話を聞きました。キャンパスライフや受験勉強について教えてくださいましたが、中でもセンターで何割と合格したかや卒業制作を見れて筑波を選んだということについては、現実的なこれからの目標が見えたし、今まで自分の中になかった観点から大学を見ている話だったのでとてもタメになりました。

先輩講話のあとに、自由見学で自分の行きたい国際総合学類がある施設へ行きました。中はとにかく広く、社会・人文学系で統一されていましたが、見たこともない名前の学科がたくさんあり、自分の知識不足を痛感しました。これから、行きたい大学の卒業論文を見ながら、どんなふうに分かれて授業を受けるのかなどを調べていきたいと思います。

そして何より刺激を受けたのは、大学のどこを歩いていても留学生がいることです。英語ではない言語を聞けて、グローバル化を実感した瞬間でした。同じ国籍同士で話しているばかりでなく、日本の筑波生と会話している姿が目立ちました。今の時点では厳しい位置にある大学ですが、この場所で学びたいと強く思える場所でした。この経験で学んだことを大切にしながら、目の前のことだけでなく受験という大きな目標を見据えて勉強に努めたいと思います。

二年五組　末永　あかり

「広い」・「大きい」など皆が思い思いの言葉を口にしていたとき、私は第一に「外国人多い!!」と衝撃を受けていました。日本に住む外国人が増えてきたと言っても、このいわき市にはそこまでいるわけではありません。だからこそ、衝撃が大きかったのと共に、国際化が進んでいるなと感じさせられました。

模擬講義では、「ニホニウム」についての授業を体験しました。わかる部分もありましたが、初めて聞くことばかりで、一つのことについてが奥深く難しい部分もありました。

施設見学では、応用加速器を見学しました。テレビで加速器を見たことがあったが、実際に見ると想像以上に大きくて迫力がありました。加速器の先端では、複数の研究を同時に行っていてその1つに物質に原子をぶつけて飛び散る粒子をいろいろな角度で調べるところがあったが、一八〇度回転する実験装置と三六〇度回転する実験装置があり、なぜ全て三六〇度回転する装置でないのかと疑問に思いました。全体会では放射線の話を聞きました。今まで知らなかったことを新たに知識として学ぶことができてよかったです。原発があったから、放射線について知ることができたのだなと感じました。その他にも、学食もたくさんあったり、入ってはいませんが図書館も大きくて驚きが多い大学見学でした!!

二年五組　吉田　峻吾

模擬講義では、ニホニウムに関する最新の化学（主に原子）を今までの化学の歴史をたどりながら考えることができ、貴重な経験を得た。大学の施設の様子を見てみると、第一印象としては森ばかりで古く田舎っぽい感じだったが、いざ敷地内へ入るとむしろ古っぽさが周りの自然をより良く見せて、自然と技術の調和を感じた気がした。先生は親切で丁寧に教えてくださり、学食は安くおいしく手軽に食べることができた。

計算科学技術センターでは、普段見ることのできないスーパーコンピュータを目のあたりにし、現代の科学技術や計算技術の偉大さに圧巻された。また、最後の講義では、改めて放射性物質や放射能について考えることができた。

筑波大学は、私の第一志望校であり自分の将来を決める場所でもある。今回の筑波大学見学を通して、筑波大の広大な自然の土地と施設はまさに私が勉強する場所としてピッタリだと思った。そのためにも、二年後の入試に向けて私は今日から更に頑張らなくてはならないと思った。